
チャット怪談

緋々色金

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チャット怪談

【Nコード】

N1341B

【作者名】

緋々色金

【あらすじ】

ある夏の夜。尾形聖司はネットカフェで最近知り合ったチャット仲間とチャットをしていた。そんな中チャット同士での怪談話をする流れに入り、困惑しながらも、猟奇話が始まっていく。

チャット怪談（前書き）

・・・あ、まだ怖くないですよ？
はじまりはじまり～

チャット怪談

夏の夜・・・とあるインターネットカフェ。個室となった部屋の中、カタカタとキーボードを叩く音を聞く青年。

個室に流れる穏やかな洋楽。だけど心はリズムに乗り、体を弾ませる。

青年の名前は『尾形^{おがた} 聖司^{せいじ}』。近場にある会社で働く、ごくごく普通のサラリーマンである。

歳は25歳と若く、自分自身まだ若いと思っているし、会社での働きようも自分自身納得のいく活き活きした青年であった。

そんな青年が叩くキーボード。その文字が流れ出るモニター。

モニターにはチャット画面が広がっていた。聖司は良く会社の帰りが遅くなり、このカフェに泊まって時間短縮を計っていた。

チャット画面では八人の名前とも付かない名前が並んでいた。

『バルタン星人』

『アキタ コマチ』

『ミヤジ』

『四十万^{しじゅうまん}』

『おうだよ』

『TAKA』

『RinRin』

そして尾形聖司の名前・・・『セイジ』。

もう少し凝った名前にしようと思っていたのに良い名前が思い浮かばなかった。

だがチャット仲間は特に気にする事も無く、自分を受け入れてくれた。その喜びが聖司は嬉しく思い、いつもはROMになりがちな手を動かし、積極的に会話に参加していた。

R「ねえねえ！やっぱり夏の夜なんだしさあ！皆あれやらない？・・・か・い・だ・ん！」

T「うつそ！やつちまうの？俺あんまりそういうセクシャルな話知らないんだよねー（笑）」

お「って、それってY談だろw」

A「でも、おもしろそー。やってみない？結構色々な地域に分かれてそうだしさー」

B「んー・・・あんまそいう話するとロクな事にならないと思うけど・・・」

セ「大丈夫でしょう、チャットで打ち込みするだけなんだし。」

四「そうそう！面と向かって話しちゃうと怖いけどねー」

ミ「んじゃきまり？つと、俺ちよつと一旦落ちるねー。すぐ戻ってくるから先に始めといてー」

そんないつもとは少し違った話の中、ミヤジが一旦回線を落とし、7人となった。

すこし興奮気味に、誰が話し出すのかをじつと、待つ。

あまり遅かったら聖司自身が話そうと思ったのだが、如何せんそういう類の話は全く知らなかった。

「「「「「んじゃ・・・はじめますか」「」「」「」

聖司の耳に・・・幻聴が聞こえたような気がした。

かくして、チャット怪談は始まるうとしていた。

チャット怪談（後書き）

怖いってなんだろう？

夜小説書いてるとなんだか怖い

特にホラー。無意味にキョロキョロしてしまう。
誰も居るはず無いのになあ？

・・・クス

バルタン星人の話（前書き）

・ ・ ・ ・ ・ 夜中に執筆中ちょっと泣きそうになっちゃった ・ ・ ・

・ ・ ・ は、はじまりはじまり～

バルタン星人の話

バ「んじゃ、俺から話すわ。最初って一番気が楽だしなあ」

一同は静まり返ったように、白いメッセージ欄に何の言葉も出なくなつた。

バ「って、おいおい。なんか緊張するなあ（。D ;）」

セイジは緊張を解こうと思って入力しようと思ったのだが、何故だか彼の話が邪魔してはいけないと思い、キーボードを叩かなかつた。一種の暇つぶしにはじめたこのチャットを、いつのまにか心底楽しんでいた。

バ「んじゃ行くぜ」

バ「俺ってさ実は大阪在中なんだよ。一応高校生でな。歳と学年は秘密なんだが・・・。」

でさ、学校であつた話なんだけどな。やっぱ学園七不思議とか有名じゃん。どこにでもあるような話。

モーツアルトの嘆き声とか、手の生えるプールとか。ま、うちはメジャーじゃないから、あんまり面白く無いと思うんだけどな。

俺の学校ってさ、コンクリで出来た4階建ての校舎なんだよ。
んで何処の教室も当然、窓があるわけよ。

んで実はこの辺から可笑しな話になるんだけど・・・。

俺の授業受けている教室って3階でさ・・・そこで変な現象
が起きるんだよ。

窓際に座った人間って、絶対ある時間に気絶しちゃうんだよ。
それも一日置きに段々前から進むように。

それが俺の教室だけかと思ったら、なんだか他の教室にも続
いててさぁ・・・。

窓際に座った奴に聞いてもさ、うんともすんとも答えてくれ
ないんだよ。

不思議に思って、窓際の席を交代してくれって頼んだんだよ。
あぁ、それでこいつの名前が『武藤^{むとう}』っつーんだけどね

なんだか泣きつかれて、「本当かい！？お願いだ！一日だけ
なんて言わずと替わってくれよ！」なんて言うんだよ。

こいつが男なら良いんだけど、ヒョロヒョロした男だから気
持ち悪くてなぁ・・・。(。D；)

多少不気味に思ってな。まあ一日だけと念を押して座らせて
もらっただよ。先生にも了解を取ったんだ。

簡単なもんで「気分が悪くて・・・窓際に座らせてください」
って言ったら簡単に了承してくれたよ。

んで一日中そこで授業受けてただけどさ・・・なーんか、
おかしいんだよ。授業に集中しなくちゃいけないのに

顔はずっと窓の外ばかり向いてるんだよな。ボーッとして
いる訳じゃないんだ。ずっと見てるんだよ、凝視ってやつ。

目を凝らしてずっと見てる空の景色。

・・・でもさ、なんだか時折フツ・・・と意識が飛びそうに
なるんだよ。おっかしいなーなんて思いつつ一日過ぎたんだ。

武藤は青い顔で「ごめんね」と言いつつ帰っていったよ。そ
の日は何事もなく終わったんだけどな。

次の日かな。武藤がまた「席を替わって欲しい」と言われた
んだ。いや、さすがに面倒くさいんでな。

断ろうと思ったんだが、なんだが武藤の様子が尋常じゃない
んだ。

仕方ないからその日一日だけつーことで替わったんだがな・
・・・それが、まーなんとも奇怪でなあ。

気付いちまったんだ。意識が飛びそうになるんじゃない、
凝視している窓の外が暗くなるんだよ。

一瞬だけな。おっかしいなーなんて思っただけでずっと見てたらさ、

それを不思議に思った後ろの女子も

窓の外を見出したんだよ。んで聞こえてきたんだ。

後ろの少女の倒れる音が。

いや、倒れる音って言ってもさ人間が倒れたくらいじゃ大きな音って出ないんだよな。

机がガシャーンって倒れた音聞いて、「あ、倒れた」程度に思ったよ。

んで、その後ろの女の子運ぼうとしたら、ずっと指指してるんだよ。窓の外。青い顔でガタガタ震えて。

いや、なにしてた、と思ってさあ。んじゃそいつ、ボソッと言ったんだ。

「と・・・飛び降り・・・飛び降り自殺・・・！」

身の毛もよだつてのはあの事かな。全身総毛立ったよ。こわいつつーよりもゾワツと来た感じ。

んで窓の外を覗き込みに行ったんだ。でもさ、下には何もないんだよ。

不思議に思ったね。あの女俺に嘘付きやがったと思ってさ。振り返ったんだよ。

で、その瞬間・・・ブワッ！って風が『落ちていったんだ』。

俺は振り返ったよ。怖かったけどな。何か落ちたように風が引つ張られた感じがしてな。でももう一度覗き込む

勇氣は無くてな。仕方なく一階まで降りてから確認しに行ったよ。でもそこには何も落ちてなかった・・・。

で、感じたんだ。ああ・・・これってもしかして屋上になにかあるのかな？って。

恐怖が極限にまで高まると手足の言う事って収まらないのな、ドキドキしながら屋上に向かった記憶があるよ。

んで、屋上まで上がっていったらな、まーた妙な珍客が居てな。

武藤だよ。なんだかキョロキョロしてさ。ずっと探し物してるって感じがした。それと同時に見つかったらヤバイオーラを出しててさ。

ひたすら必死になってる武藤に話しかけたんだ。

「・・・おまえなにしてんの？」

いやー・・・びびったんだーあの時。武藤の顔に。ヒョロヒョロしていつも元気ない奴の

血走った睨み顔って怖いわ。

「・・・なんにもしてないよ・・・」

オドオドしながら俺が入ってきた入り口から出て行って・・・
そしてそのまま出て行ったんだ。

特に理由も無く不思議に思ったんだ。だって、そこに・・・
足跡があつたんだよ。

飛び降り寸前に残される靴。そんな感じの足跡でさ。そこが
また、俺の教室の真下なんだよ。

こりゃ、なんかあるなと思って、色々な所にアプローチかけ
て聞きまくったんだ。

んで、色々な調査結果の元解つたのが、俺の通う学校で飛び
降り自殺があつたって事な。しかも俺の在学中。

その飛び降り自殺の生徒は女。なんで気付かなかったかと言
うと夏休みの間にやっちゃったらしくてな・・・。

それなら噂や先生から教えてもらってもおかしくないのに、
おかしいなーと思ったんだよ。

不思議と思うんだがな、理由はあつたんだ。遺書が見つから
なかったんだ。

残念ながら名前も落ちた理由もなーんにもわからなかったん
だ。

んで数日後。放課後にまたそこに行ったらな・・・いや、こ
れがまたイタズラか何かと思ったんだよ。

・・・置いてあるんだよ。靴と・・・遺書が・・・。

ハハッ・・・信じられる？俺今、手震えてるよ。・・・（
ー、）ノ・・・はは。顔文字書かないと怖くてやってらんねえ。

んでな、慌てて誰か落ちてるんじゃないかと思ってな、確認
したよ。フェンスから乗り出して覗き込んだらな。

だーれも居ないの。ただ、遺書と靴があるだけ。

・・・で・・・お前ならどうする？普通は逃げるか？泣く
か？

俺な・・・開けちまったんだよ。靴の上に乗っている遺書。

中には色々複雑怪奇な事がツラツラ書いてあったよ。自殺者
の遺書って結構俺らには理解できないのが多いのよな。

でもな・・・一行だけ、理解できたのがあったんだよ。

「武藤に突き落とされた」

・・・ククク。ギャグみてえだろ？あんな。この一行、いき
なり出てきたんだよ。

手は紙を握り締めたまま、ずっと離れない。一行一行血糊の
ように増えていく言葉。

「探さなきゃ」

「あいつを．．．地獄にツレテ
イカナカヤエ！」

．．．こええな．．．ここまでにしておきたいんだけど．．．
やっぱだめだよな？

えらいモン見つけた事でかなり気が動転してな．．．その遺
書持ち帰っちまったんだよ。

夜、ベッドに入り込んでガタガタ震えてるんだけどな．．．
窓からグシャって音が．．．

聞こえるんだよ！何回も何回も！人のつぶれる音！怖いよ！
俺マチで泣いちゃったよ！

でさ、「俺じゃない！俺は武藤じゃない！」って叫んだんだ！

何回も何回も！親達に聞こえないのか何故か親たちも見に来
てくれない！

．．．ふう．．．でさ．．．その悪夢のような夜が過ぎてさ．
．．．はは、俺怖くて狂っちゃったのかな。

．．．武藤の机に入れてやったんだ。あの子が会えますよう
につて．．．（．．．）

ハハハ．．．んでな、どうなったと思う？

三時間目．．．。．．．ふとな．．．窓際の席に座ってる武

藤を見たんだ・
・
・。

窓の外をな．．．クク．．．！

ズルズルってスッゴイ笑った女が這い降りて来たんだよ。ズルズルってな！

俺はそんな状況を呆然と見てた……。いや笑ってたかも知れねえ。

で・・・な・・・聞こえたんだよな。俺の耳に。俺だけの耳に。

「見つけたあああああ！……！！！」

つてさ。．．武藤？はは。．．落ちて行つたよ。地獄に。
女に引きずられて。落ちたよ。窓から。地獄に。

これで終わり……にしたいんだけどな。

一応補足しとくわ。武藤の奴、あの落ちた女学生に夏休み交際を迫ってな。断られて、逆上。突き落としちゃった。

なんつうメロドラマ……。と思うなかれ人の生命がかかってしまってるかなら。

でな……。俺、思うんだけど、毎日毎日、落ちた時間に探しに着てたんじゃないかなって思うんだ。彼女な。

俺が、そう思ったのも理由があつてなあ……。武藤が死んでから、あの席俺の席になっちゃったんだよ。

面白かったし、あの窓の風景が好きだったんだ。

好きだったんだ……。

毎昼……。彼女が落ちてきてさ、こっち見て「見つけた」って毎日言われるまでな」

グシャッ！と言う音と共に聖司は後ろを振り向いた。後ろは防音がなされたネットカフェの窓。

聖司は震える体を抑える事ができず、流れている音楽の音量を大きくする。

バルタン星人の話（後書き）

尚チャット風味を出すため顔文字とか入れちゃってます。

でもほんと、キヨロキヨロしちゃうよね・・・あ、感想お待ちし
グシャッ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1341b/>

チャット怪談

2010年12月5日05時53分発行